

## ■ 書 評



### カプラン臨床精神医学テキスト第3版—DSM-5 診断基準の臨床への展開—

井上令一 監修, 四宮滋子・田宮聡 翻訳  
 メディカル・サイエンス・インターナショナル  
 2016年5月 1672頁  
 本体価格 20,000円+税

本書は KAPLAN & SADOCK'S SYNOPSIS OF PSYCHIATRY Behavioral Science/Clinical Psychiatry, 11th Edition の日本語訳第3版として出版された。原著第1版が出たのは1972年、その後3~5年の期間を経ての改訂が積み上げられ、第7版(1994年)で初めて日本語訳第1版(1996年)が訳出された。1998年に Kaplan 教授は亡くなっているが、その遺志が引き継がれて、その後は Sadock 教授夫妻が責任編集者となり、最近では Pedro Ruiz 教授が加わっている。ICD-10, DSM-IV-TR に準拠する原著第9版が2003年に出版され、日本語訳第2版(2004年)となり、今回は原著11版の邦訳として12年ぶりの改訂となった。

最新版である本書では DSM-5 への対応を中心とした改訂が主眼となっており、日本語版の書名の副題「DSM-5 診断基準の臨床への展開」でもそのことが反映されている。DSM-5 への準拠に関して疾患分類の変更などに忠実に対応しており、病名表記についても精神神経学会により提案された内容に準じた日本語病名で統一されている。また最新の内容への更新については DSM-5 の準拠に留まらず、ほぼ全ての参考文献が2010年前後と最近の論文に刷新されていることや、多くの図表が2000年以降の最新の文献によるなど大幅改訂となった。

日本語訳第2版は青など寒色系で統一されていたが、今回の第3版は暖色系の色合いとなり、レイアウト的にも見出し表現の色分けや症例の提示も統一した背景色とするコラムにするなど見やすさが意識された書籍となっている。また、歴史的に重要な項目に関する写真や教科書的な説明図表も数多く含まれており、精神疾患に関する主要なポイントが写真や図式によって初学者にもわかりやすいように工夫されて

いると感じられた。

本書における新規の内容としては「公衆精神医学」「精神医学の世界的状況」という新たな章や「神経発達と神経新生」「応用電気生理学」「正常性とメンタルヘルス」「ポジティブ心理学」など複数の節が加えられ、精神療法の章では Mentalization や Mindfulness などの最近の治療法に関する記述が盛り込まれている。また社会心理学的な分野を中心とする全ての章が、最新の進歩を反映するように改訂された。その他、薬物治療に関する章では各々の薬剤を元に複数の適応疾患を紹介するなど、実際の臨床应用到即した記述となっていると思えた。また最後に「徴候および症状に関する用語集」が加わり、専門用語に不慣れな初学者にも対応する形になっている。また本書には肥満症とメタボリック症候群との関連、性機能不全の多面的な記述や精神疾患の身体診察上の特徴など多様な内容が含まれている。医学の多くの領域ではこころの健康の側面は大切であるが、本書は精神科以外の医学の諸領域をはじめ、心理学などこころの健康に関連する諸分野からに関心に応える内容を持つと思われた。

ところで、原著の副題名には Behavioral Sciences (行動科学) という用語が入っているが、この行動科学については第2次世界大戦後の米国において自然科学と社会科学が協力して様々な現実的な諸問題にアプローチしようとする運動の中から生まれたとされる。わが国でも第59回日本精神神経学会(1962年)にて精神医学研究における行動科学的な方法論が提唱され(臺弘, 精神誌, 64:944-950, 1962)、「精神医学」の9巻9号(1967年)で精神医学と行動科学の関連が特集されているが、Behavioral Sciences という用語が本書の初版の発刊当時の空気や著者らが込めた思いを今日に伝えていると思われた。行動科学の定義の一つには「心理学, 社会学, 人類学, 経済学, 政治学など、特に人間や集団の行動あるいはまた人間や集団がそうした行動の結果作り出す制度, 価値, 文化といった複雑な人間現象を探究する社会科学の諸分野からなる総合科学」(田中靖政: 心理学を学ぶ。有斐閣, 1997)とある。本書を通じて、精神医学を学ぶ上で人間一般への理解を深めていくこと、そして人間のこころのあり方について総合的・統合的な視点から解釈することの大切さを改めて感じている。

(谷井久志)